

浄土真実の行

小野蓮明

「如来尊号甚分明」。このころは、如来とまふすは無碍光如来なり。尊号とまふすは南无阿弥陀仏なり、

尊はたふとくすぐれたりとなり。号は仏になりたまはぬ
てのちの御なをまふす、名はいまだ仏になりたまはぬ
ときの御なをまふすなり。この如来の尊号は不可称・
不可説・不可思議にましまして、一切衆生をして無上
大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のちかひの御な
なり。この仏の御なはよろづの如来の名号にすぐれた
まへり、これすなわち誓願なるがゆへなり。〔唯信鈔
文意〕・『定観全』三・一五六頁

如来の尊号、すなわち南无阿弥陀仏の名号をもって、名

号不思議という道理を踏まえて、直ちに「一切衆生をし
て無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のちかひの御
な」であるとして解する『唯信鈔文書』の名号解釈は、親鸞
の晩年の最も注目すべきことばの一つである。

法然が浄土宗独立の根本原理を明らかにした『選択集』
の最初に、「南无阿弥陀仏往生之業
念仏為本」と標榜されたように、
念仏の一行をもって往生浄土の行であると確かめてきたの
が、浄土教の歴史であった。その法然を終生「よきひと」と
仰ぎ、その「よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、
別の子細なきなり」と言い続ける親鸞もまた、念仏を往生
浄土の道として語り続けていたことは、親鸞の法語録であ
る『歎異抄』がよく伝えているところである。第一条の冒
頭に、

弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏まふさんとおもひたつころろのおこるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり。(『定親全』四・三頁)

と言ひ、また第二条では、「十余ヶ国のさかひをこえて、身命をかへりみずしてたづね」来た東国の門侶の「御ころさし」を、「ひとへに往生極楽のみちをとひきかんがためなり」と言い当てて、念仏よりほかに往生の道のないことが問答されている。総じて『歎異抄』は念仏往生として仏道を明らかにし、念仏を往生浄土の行として語っている。そこには、『歎異抄』の編者と問答し、対話した頃とほぼ同時代の親鸞の著作である『唯信鈔文意』『尊号真像銘文』や『一念多念文意』などに見られるような理解、すなわち、念仏を本願の名号と了解し、その名号こそ「不可称・不可説・不可思議にましまして、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のちかひの御な」であるといつて、証大涅槃の唯一の法であると解する立場は、必ずしも明瞭に見られない。証大涅槃の無上の法として名号を語る親鸞と往生浄土として念仏を語る親鸞、親鸞晩年のいわゆる仮名聖教等と親鸞の法語を編集した『歎異抄』と、その両者の相違や相関関係については極めて興味のある問題

であるが、その検討は別の機会に譲り、ここでは、念仏を往生浄土の行であると解する立場を踏えながら、むしろより積極的に念仏を本願の名号として捉え、一切衆生をして無上大涅槃にいたらしめる無上の法であると解し、「浄土眞実の行」として、即ち衆生に浄土を開示する行として捉えた意義を尋ねたい。

二

南無阿弥陀仏 往生之業。(『真聖全』一・九二九頁)

法然の『選択集』は、この一文を最初に掲げて、南無阿弥陀仏は選択本願の念仏であるから、いかなる人にとつても往生浄土の行であることを明らかにしたのである。法然をして念仏を往生浄土の行と領かしたものは、言うまでもなく善導の「散善義」就行立信の文の「願彼仏願故」の一句であった。

一心専念、弥陀名号、行往坐臥、不問時節、久近、念、不捨者、是名正定之業、順彼仏願故。(『真聖全』一・五三八頁)

法然を念仏の教えに回心せしめた善導のこの一文は、往生浄土の行について正雜、助正の取捨廢立を経て、念仏一行が正定の業であることを決定し、その理由は、偏えに念

仏は「彼の仏の願に順ずる」行であるからであると、極めて簡明直截に念仏一行の確かさを言い当てている。しかし、善導が念仏一行が正定の業である事実について「順彼仏願故」の一句をもって確かめたとしても、何故に五種正行のうちただ念仏のみが彼の仏願に順ずるのであろうか。そのような疑問に対して、この一言に出遇って念仏の教えに目覚め立った法然は、「順彼仏願故」の一句に如来選択の願意を聞き開いて、念仏こそ彼の仏の本願選択そのものであることを明らかにしたのであった。すなわち、『選択集』二行章において、

問曰、何故五種之中、独以称名念仏為正定業乎。

と問うて、それに答えて

答曰、順彼仏願故。意云、称名念仏は彼仏本願行也。故修之者、乘彼仏願、必得往生也。〔真聖全〕

一・九三五頁)

といて、行の廃立を決定するものは、決してわれわれ衆生の恣意ではなく、如来の選択本願であることを明らかにしている。称名念仏が正定の業であるのは、彼の仏の本願の行であるからであって、そのことはただ偏えに選択本願の世界に沈潜し、その願心の深い信証においてのみ行の廃立の真に内的な理由を証知し得るのである。まことに念仏

は選択本願の行であるから、「彼の仏願に乗じて、必ず往生を得る」のである。法然は、念仏が本願の行とされる本願の意義については、「其の本願の義、下に至りて知るべし」といって、本願章で展開するのである。

本願章では、『大経』の選択摂取の意義を問うて、

何故、第十八願、選捨一切諸行、唯偏選取念仏一行為往生本願乎。

と問い、それに答えて、

答曰、聖意難測、不能輒解。雖然今試以三義一解之、一者勝劣義、二者難易義。〔真聖全〕一・九

四三頁)

と述べている。この自問自答でまず知られることは、一切の諸行を「選捨」して、ただ偏えに念仏一行を「選取」して往生の本願となす仏の「聖意」は、われら衆生の測り知るところではなく、あくまでも如来の衆生救済の絶対意志であるというより他ない、ということである。もし衆生の分別智をもって測り知り得るものであるならば、それは、衆生を救う真実の法とはなり得ないであろう。「聖意測り難し、輒く解するに能はず」という一言こそ、衆生の分別智を超絶した選択本願念仏の救済の絶対性をよく示し表わしている。それ故に、選択摂取の意義を問うということは、

有限なる衆生の分別智をもつて、無限絶対なる如来の選択本願のはたらきを、単に客観的に尋ね問おうとするものではない。衆生の分別智をもつては、いかにしても測り難き仏意を、本願念仏に生きる現在のわが身が、わが身を「竊かに」推求するのである。自我心が仏心を問うのではなく、如来の願心にめぐめ立った信心が、逆に久遠の願心を推求するのである。法然が自らの念仏の身を通して、その救済の実感から推知された念仏選択の聖意が、念仏のもつ勝・易の二徳であった。一切諸行を選捨て、念仏一行を正定の業と選択撰取されたのは、念仏は本質的に本願の行として、勝の徳と易の徳をもつものであるからであった。

勝劣者、念仏は勝、余行は劣。所以者何。名号者は万徳之所帰也。然則弥陀一仏所有四智・三身・十力・四無畏等一切内証功德、相好・光明・説法・利生等一切外用功德、皆悉撰在阿弥陀仏名号之中。故名号功德、最爲勝也。余行不然、各守一隅、是以爲劣也。(中略)然則念仏名号功德、勝余一切功德。故捨劣取勝、以爲本願一歟。

次難易義者、念仏易修、諸行難修。(中略)故知、念仏易、故通於一切、諸行難、故不流通諸機。然則

爲令一切衆生、平等往生、捨難取易爲本願一歟。(中略)然則弥陀如来、法藏比丘之昔、被催三平等慈悲、普爲撰於一切、不下以造像・起塔等諸行、爲往生本願、唯以三称名念仏一行、爲其本願也。(『真聖全』一・九四三―五頁)

法然は、念仏のもつ勝易の徳について、このように述べている。

本願章に語り明されているように、如来の選択本願という本源の世界に目覚め立つとき、念仏以外の一切の諸行を廃捨するのは、単に末法五濁の世に生きるわれら罪濁の機根にとつて、時機不相応であるという外的な理由のみでなく、それは如来によって選捨てられた「非」本願の行なるが故に、「千中無一」の雜行として廃捨されるべきものなのであった。念仏一行が往生浄土の行たる正定業であるのは、如来の本願における選択撰取のものによるのである。

弥陀成仏のこのかたは

いまに十劫とときたれど

塵点久遠劫よりも

ひさしき仏とみえたまう

南無不可思議光仏

饒王仏のみもとにて

十方浄土のなかよりぞ

本願選択撰取る(『浄土和讃』・『定観全』二・三六頁)

と讃詠されているように、本願における選択撰取のはたらきは、もとより仏自身の選択撰取であり、しかも「塵点久遠劫より」の「ひさしき仏」のはたらきである。それ故に、念仏一行が何故に往生浄土の行として正定の業であり得るのかは、全く如来の衆生救済の根源意志であって、われら衆生の推知し得るところではない。だから法然は、五種正行のうち称名念仏をもって正定業とされる根源的理由を問うて、それに答えるとき、ただ善導の教言に従って、

答曰。願ニ彼仏願ニ故。意云、称名念仏是彼仏本願行也。故修レ之者、乘ニ彼仏願ニ、必得ニ往生ニ也。

というより他はなかつたのであり、また、その測り難き仏意を竊求して、勝劣・難易の二義を見出しながらも、『選択集』の総結の文でも、善導に導かれて、
正定之業、者、即是称ニ仏名。称名必得レ生、依ニ仏本願ニ故。(『真聖全』一・九九〇頁)

と言わざるを得なかつたのであろう。
更に、法然は『選択集』二行章において、正雑二行の得失を論ずるところで五番の相對をあげ、その第四に不廻向相對を示して、念仏には、

縦令不レ用ニ廻向、自然成ニ往生業。(『真聖全』一・九三七頁)

といつて、念仏は不廻向の行であると了解している。不廻向の行とは、念仏は、いかなる意味においてもわれら衆生の働きではなく、如来の行、本願のはたらきである、という了解である。法然は念仏が不廻向の行であることを、善導の「玄義分」の文、

故『疏』上文云。「今此観經中十声称仏、即有二十願・十行一具足。云何具足。言三南無者、即是帰命、亦是発願廻向之義。言三阿弥陀仏者、即是其行。以三斯義ニ故、必得ニ往生。」(『真聖全』一・九三七頁)

という、いわゆる名号六字釈の文を挙げて、その説明として当てている。

念仏は本願のはたらきであって、不廻向の行であるという法然の確認は、また直ちに發菩提心無用という断言にまで徹底するのである。

本願の念仏には、ひとりだちをさせて助をさゝぬ也。助さす程の人は、極楽の辺地にむまる。すけと申すは、智慧をも助にさし、持戒をもすけにさし、道心をも助にさし、慈悲をもすけにさす也。それに善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながらに念仏して、たゞむま

れつきのまゝにて念仏する人を、念仏にすけさゝぬと
 は申す也。『和語灯録』巻五・『真聖全』四・六八二―三頁
 と述べているように、仏道を歩まんとする者にとって必須
 の要件とされてきた、智慧・持戒・道心・慈悲、そのすべ
 てが無用と否定されて、「本願の念仏」だけが、「ひとりだ
 ち」の念仏として絶対の行である、といわれている。念仏
 を不向の行と確認した法然は、発菩提心を必須の要件と
 してきた仏道の在り方を一転して、発菩提心をも無用と言
 い切ったのである。発菩提心無用の断言には、発菩提心を
 必須として伝統されてきた二千年の仏教の歴史の底に、い
 わゆる修道的といわれる人間の在り方自体がもつ矛盾を、
 白日のもとに透見した眼と、人間における千差の行修を一
 挙に無に帰してしまふような、人間存在そのものへの最も
 鋭い凝視とが、そこにある。念仏の行が選択本願の行であ
 る限り、衆生にとって不向の行であり、従って発菩提心
 の行をも非本願の行として否定し廃捨した法然の立場は、
 発菩提心による行修をもつて仏道を規制していこうとする
 立場そのものを、恰も道絆が、
 然^{ルニ}持^ル得^ル者^ハ甚^ク希^ク。若^シ論^ニ起^ル惡^ニ造^ル罪^ハ一^ニ何^レ異^ナ。暴^ク風^ニ駛^ル雨^ハ一^ニ安^ク
 樂^ク集^ル。『真聖全』一・四一〇頁

と喝破したように、現実の足下に否定し尽くしてしまふよ

うな、人間存在そのものの根底に最も深く目覚め立った断
 言である。それは、

諸^レ行^ハ非^レ機^レ失^レ時^ヲ、念^レ仏^ハ往^レ生^ニ当^レ機^レ得^レ時^ヲ。〔『選択集』・

『真聖全』一・九八三頁〕

といわれるように、時機の現実に対する深い洞察と自覚を
 通しての断言であったといえる。

三

称名念仏の一行が往生浄土の行であるのは、念仏が本願
 の行であるからである、この一点が法然の確認点であった。
 しかるに親鸞は、このような法然の教説に導かれながら、
 本願の行としての念仏の意義を、さらに根源化して選択本
 願の行、本願の名号と了解し、如来回向の行、すなわち
 「阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまうところ」^⑤の大
 行であると領き、従って、そのような本願の名号は、ただ
 に往生浄土の行であるのみでなく、むしろ「一切衆生をし
 て無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のちかひの御
 な」として、われら衆生に浄土を開き願わす真実なる行と
 して、「浄土真実の行」であるとして了解するのである。

「南無阿弥陀仏^{往生之業} 念仏為本」と標挙して、浄土仏道の根幹

が「南無阿弥陀仏」の一行にあることを明らかにした法然

の教言に育まれた親鸞もまた、

称名則是最勝真妙正業。正業則是念仏。念仏則是南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏即是正念也、可三知。〔教行信証〕・『定親全』一・二三頁)

といって、南無阿弥陀仏の念仏において、仏の本願を憶念している。しかし、その称名念仏の意義を「大行」として明すとき、親鸞は、

大行者則称ニ無碍光如来名。(同・二七頁)

と定義するのである。言うまでもなく、『観無量寿経』は、下下品の衆生に、

汝若不レ能レ念者、应レ称ニ無量寿仏。〔真聖全』一・六五頁)

といって、「称無量寿仏」即ち称南無阿弥陀仏の称名行を勧めている。しかるに親鸞は、大行を釈して称南無阿弥陀仏といわずに、「称無碍光如来名」という。如来のみ名は、無論南無阿弥陀仏と現わされるが、その名を単に称することが大行ではなく、阿弥陀の名義に帰して「無碍光如来の名を称するなり」というのである。南無阿弥陀仏は、決して単なる如来の名ではない。それは、本願のことば(言)であり、本願の行であって、如来が行じている名である。

「大行とは則ち無碍光如来の名を称するなり」とは、無

論親鸞自身の信仰的自覚からえた大行の了解であるが、その基づくところは『浄土論』『浄土論註』によるものである。世親の『浄土論』において、願生の行として説く五念門のうちの第二讚嘆門に、讚嘆の行の内容として、

称ニ彼如来名ニ如ニ彼如来光明智相、如ニ彼名義、欲ニ如レ実修行相応ニ故。(『真聖全』一・二七一頁)

と示している。この「称彼如来名」を『浄土論註』(下)では、

「称彼如来名」者、謂称ニ無碍光如来名也。(『真聖全』一・三二四頁)

と了解している。親鸞の大行釈は、直接的にはこの『論註』の指南によるものである。『論註』は更に続いて、

「如彼如来光明智相」者、仏光明は智慧相也。此光明照ニ十方世界ニ無レ有ニ障碍、能除ニ十方衆生無明黒闇、非レ如ニ日・月・珠光但破ニ室六中闇也。「如彼名義欲如実修行相応」者、彼無碍光如来名号、能破ニ衆生一切無明、能満ニ衆生一切志願。(同)

と述べている。彼の如来の名を称することが讚嘆の行であるのは、彼の如来の名が如来の光明智相を表わすものであるからである。もと世親における一心帰命の信の表白である「帰命尽十方無碍光如来」を、親鸞は、同時に如来の名

号を現わすものであると解するのにも、如来の光明智相を無碍光の上に深く感得されたからである。『尊号真像銘文』に、

「帰命尽十方無碍光如来」とまふすは、帰命は南無なり、また帰命とまふすは如来の勅命にしたがふことなり、尽十方無碍光如来とまふすは、すなはち阿弥陀如来なり、この如来は光明也。尽十方といふは、尽はつくすといふ、ことごとくといふ、十方世界をつくしてことごとくみちたまへるなり。無碍といふは、さわることなしと也、さわることなしとまふすは衆生の煩惱悪業にさえられざる也。光如来とまふすは阿弥陀仏なり、この如来はすなわち不可思議光仏とまふす。この如来は智慧のかたちなり、十方微塵刹土にみちたまへるなりとするべしとなり。〔定親全〕三・八六―七頁〕

と了解されているように、無碍光如来の名は、如来の無碍なる願心を現わす名のほかではない。

したがって、法然が一切の諸行を選捨て往生浄土の行として選択本願念仏の一行を選択するという、いわゆる行々相對の形で示された念仏を、親鸞は本願の名号に根源化して、大行としての念仏を、単に称南無阿弥陀仏と表現せず、「称無碍光如来名」といわれたのは、南無阿弥陀仏の名義に帰して、即ち無碍光如来の願心に帰して、如来の願

心の名のりに目覚め立つという、本願の名号の自覚性を明瞭にするためであったといえる。法然は、善導に導かれて南無阿弥陀仏が選択本願の念仏として、仏道の行であることを明らかにしたのであるが、いま親鸞は、大行としての念仏を「称無碍光如来名」と定義したのは、念仏の呪術化への全き否定と、仏道の行がまさに仏道の行として成り立つ、その自覚性を確保するためであったといえる。

無碍光如来の願心を現わす名としての大行釈は、このように『論』『論註』の指南によるものであるが、『浄土論』は正確には「無量寿経優婆提舍願生偈」といわれるように、『無量寿経』の論である。従って、『浄土論』の意義を問うとき、『論』を超えて『論』を見ることが必要である。つまり『無量寿経』に教説される如来の本願に照して名の意義を決定したのが『論』の立場であるから、経論相照して名の意義を確かめなければならない。『浄土論』では願生の行を五念門として示すが、如来の本願において「乃至十念」と表わされている。『浄土論』が『無量寿経』の論書として、如来の本願の意義を尋ね明らかにしたものである限り、『経』の「乃至十念」の念と『論』の五念門の念とは、全く別のものと解することはできない。本願における「乃至十念」は念仏である。されば五念門の行

も念仏であろう。しかし、礼拝、讚嘆、作願、觀察、観察、回向と示された五念門とは、決して念仏の概念の分析や解説ではない。それは、如来が如来自身を失わずして衆生の上に見出し現成して衆生の行となる、如来が如↓来する如来の歴史、念仏の歴史を示すものであるまいか。如来自身の行が衆生の上に成じ衆生の行となる、如↓来の現成現働の歴史が五念門の行であるまいか。

本願に立って五念門を見るとき、その中心は讚嘆門と回向門である。讚嘆門では、

云何讚嘆、口業讚嘆。稱ニ彼如来名一。如ニ彼如来光明智相一。如ニ彼名義一。欲ニ如レ実修行相応一。故。〔『真聖全』一・二七一頁〕

といて、そこに「称彼如来名」と如来の名が示され、回向門では、

云何廻向、不レ捨一切苦惱衆生ニ。心常作願。廻向為レ首得ニ。成ニ就ニ。大悲心ニ。故。〔同〕

といて、如来の回向が説き示されている。親鸞は、この教示を踏えて本願成就の文の「至心回向」を釈して、『一念多念文意』に、

「至心廻向」といふは、至心は、真実といふことばなり、真実は阿弥陀如来の御こゝろなり。廻向は、本願

の名号をもて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。

〔『定親全』三・一二七頁〕

と述べているように、如来が名をもつて回向するのである。「本願の名号をもて十方衆生にあたへたまふ御のり」、このほかに如来の回向はない。本願の名号がわれら衆生に与えられている事実、名号として如来が如来自身を失わずして衆生の行となる事実、これが回向である。本願の仏道においては、名は単に名ではなく、行である。本願の名は如来自身の行であるが、如来自身の行が如来自身を失わずに衆生の行となるのである。衆生の行となるとは、われら衆生の行信となるということである。本願の名としての念仏は、衆生の行信となるといっても、如来自身の行であり、如来自身のはたらきであることを失うのではない。如来自身の行が衆生の行信として現前し躍動するのである。称名念仏を本願の名号に帰して、如来の無碍なる願心の躍動せる大行と了解する所以もここににある。それ故に、親鸞は大行の内実をおさえて、

斯行、即是撰ニ諸善法一、具ニ諸徳本一。極速円満、真如一実、功德宝海。故名ニ大行一。〔『教行信証』・『定親全』一・一七頁〕

といい、大行成就の願を示して、

然斯行者出^{タリ}於^ニ大悲願^一。即是名^ニ諸仏稱揚之願^ハ、復名^ニ諸仏稱名之願^一、復名^ニ諸仏咨嗟之願^一。亦可名^ニ往相回向之願^一、亦可名^ニ選択稱名之願^一也。(同)

と述べるのである。ここに大悲の願というのは、第十七・諸仏稱揚の願であることは言うまでもない。如来の本願は、いづれも大悲の願でないものはないが、特に第十七願を大悲の願というのは、そこに名号の成就が誓われているからである。如来の大悲は、まさに名号の回向成就によって満足するのである。如来の大悲が名号の回向成就によって満足するというのは、本願の名号によって、如来自証の广大智慧の世界である浄土が、名号を信樂する衆生に開示されるからである。

四

親鸞の本願理解には注意すべき特徴がある。それは、本願について語るとき、因位の願心とともに、それ以上に本願成就の事実に関心をもち、ということである。『教行信証』において重要な事柄を論じ確かめる根拠として、親鸞はつねに因願の文と共に、必ずその願の成就文を挙げている。いま「行巻」で大行を「称無碍光如来名」といい、その根拠を「出於大悲願」といって、大悲の願の意

味を問うて、第十七願文とその成就文を挙げているが、それは、親鸞が最も深い関心をもったのは、因位の願心を現わす願文であるよりも、むしろそれ以上に、その願の成就を語る成就文の教説であつたといえよう。

すでに『大無量寿経』下巻の最初に、

仏告^ニ阿難^一。其有^ニ衆生^一、生^ニ彼国^一者、皆悉住^ニ於

正定之聚^一。所以者何。彼仏国中、無^ニ諸邪聚及不定

聚^一。(十一願成就文) 十方恒沙諸仏如来、皆共讚^ニ歎

無量寿仏威神功德、不可思議^一。(十七願成就文) 諸有衆生、

聞^ニ其名号^一、信心歡喜、乃至一念^一。至心回向^一願^レ

生^ニ彼国^一、即得^ニ往生^一、住^ニ不退転^一。唯除^ニ五逆誹謗正

法^一。(十八願成就文) (『真聖全』一・二四頁)

と説き出されているように、そこに第十一願、第十七願、第十八願の成就文が一連に教説されている。眞実報土の生を得ることが証大涅槃を意味することであると誓う第十一願、その眞実報土をわれら衆生に開く行としての名号を誓う第十七願、そしてこの諸仏咨嗟の如来の名号に喚び覚まされた願生浄土の心、すなわち証大涅槃の眞因である本願の信の成就を誓う第十八願の、それぞれの成就文である。いまこれらの願成就の文の意味深い教説に注意するとき、とりわけ第十八願成就文によれば、衆生における一心帰命

の信の發起は、「聞其名号」をその縁とすると教えている。その名号とは、名号において「十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを讃嘆したまふ」諸仏の教説を意味していることは、言うまでもない。

だから「行巻」では、親鸞は第十七願の因願とその成就文の他に、更に、

又言、我至^チ成^ニ仏道^ニ名声超^ム十方^ニ、究竟^シ所^ニ聞^ク誓^ハ不^レ正^ニ覺^ス。為^ニ衆^ノ開^キ寶藏^ニ廣^ク施^テ功德^ノ寶^ヲ。常^ニ於^テ衆^ノ大^ノ衆^ニ中^ニ説^ク法^ヲ師子^ノ吼^ス。

又言、無量寿^ノ威神^ノ無^ク極^ニ十方^ノ世界^ニ、無量無^ク辺^ニ不可^レ思議^ノ諸^ノ佛^ノ如^シ來^ノ莫^ク不^レ稱^ス嘆^ク於^テ彼^ノ。又言、其^ノ佛^ノ本^ノ願^ノ力^ノ聞^ク一^ニ名^ニ欲^ス往^ク生^ク、皆^ニ悉^ク到^リ彼^ノ國^ニ。自^ラ致^ス不^レ退^ク轉^ス。〔定親全〕一・一八頁)

という經文を示し、また異訳の『大経』の文までも引文して、衆生における信心の發起は、名号を所依とし、聞名を縁として成立するものであることを表わしている。聞名とは、名号において無量寿仏の威神功德不可思議なることを讃嘆する、諸仏の称揚咨嗟を聞くことである。親鸞は、何よりも名号において、十方無量の諸仏の讃嘆称名を聞く一人であったのである。しかし親鸞の信仰的自覚においては、名号は、十方諸仏の称讃する如来の名であり、名号に無量

諸仏の称讃を聞く名であるのみでなく、むしろより根源的には、名号は、如来そのものの衆生への名告りであり、衆生の上に如来が自己を現前し現行せしめたものという意味をもつことばであった。『大無量寿経』の教説に導かれて、南無阿弥陀仏の名号に十方諸仏の咨嗟讃嘆を聞き当てた親鸞は、さらに一步踏み込んで、南無阿弥陀仏の名号は、親鸞における如来そのものの名告りであって、「心を至し信樂して我が国に生まれんと欲」えという、本願招喚の勅命であった。//我れに目覚めよ//我れに生きよ//と、諸有の群生を喚び続ける本願招喚の勅命であった。そのことは、善導の六字名号積を承けて展開した、親鸞の独創的な名号解釈に明瞭である。

爾者南無之言^{ナリ}。歸命^ハ。是以^テ歸命^者本願招喚之勅命也。言^ニ發願^ニ回向^ニ者如来已發願^テ回^シ施^ス衆生行^ニ之心也。言^ニ即是其行^ト者即選擇本願是也。〔教行信証〕・『定親全』一・四八頁)

親鸞のこの名号了解によれば、南無阿弥陀仏は、決して単なる如来の名ではない。如来のもっている名でもなく、如来を表わす名でもない。むしろ如来が名である、如来が如来自身を名をもって限定され、名として自己を限定し自己を顕している、そういう意味をもつ名である。如来の衆

生への喚びかけ、衆生への名告りとして、如来が衆生の上に自己を現前し現行せしめている事実を語る名である。如来が衆生となり、衆生として自己を限定した、それが名である。従って、名は行である、如来が如来として如来のままに行じている名である。名において如来が行じているのである。名にはたらく「至心信樂欲生我國」の招喚は、無始已來生死海に沈迷する衆生を翻して本来の我國に喚び出すという、如来の無窮なる悲心である。曠劫流轉の衆生は、名において如来に帰り、願生の一道に立たしめられるのである。それ故に、前掲の名号釈では、「必得往生」を釈して、

言ニ必得往生ト者、彰ハスルコトヲ、至ニ不退位一也。『經』言ニ即得ト「積」云ニ必定ト、即言由ニ聞ニ願力ニ光下闡報土真因決定、時剋之極促也。必言審也。然也。金剛心成就之貌也。(同)

と言うのである。

いま一度小論の最初に掲げた『唯信鈔文意』の名号了解に注意してみよう。そこでは、

号は仏になりたまふてのちの御なをまふす、名はいまだ仏になりたまはぬときの御なをまふすなり。

と言われているように、名号について、号は「仏になりた

まふてのちの御な」を意味し、名は「いまだ仏になりたまはぬときの御な」をあらわすものとして、いわゆる因果をもつて名号のはたらきを了解している。生死する人生の業を転じて「往生の業」となす根源なる行である南無阿弥陀仏の名号は、それ自体因果を超えている。しかし、因果を超えた如来の根源行が、因果としてわれらの人生のただ中に現前し躍動する名号のはたらきを、親鸞はこのように了解したのであろう。

では、「いまだ仏になりたまはぬときの御な」、すなわち因としての南無阿弥陀仏とは何か。それこそ「一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となのりたまひて、無碍のちかひをおこしたまふ」といわれる法蔵菩薩の本願である。法蔵菩薩、それは、

この一如よりかたちをあらわして、方便法身とまふす御すがたをしめして、法蔵比丘となのりたまひて、不可思議の大誓願をおこしてあらわれたまふ御かたちをば、世親菩薩は尽十方無碍光如来となづけたまつりたまへり。『唯信鈔文意』・『定親全』三・一七一頁

と言われているように、一如が一如として自らを自己実現するために、「一如よりかたちをあらわして」、「一切苦惱の群生海」といわれる衆生の根底にまで自らを没し来って、

その衆生勤苦の本を抜いて、「一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめ」んと「從如来生」する、如来の最も具体的な現働を表わすものである。しかも経説によれば、一切苦悩の衆生を荷負して自らを成就せんとはたらく法蔵菩薩の願行は、生死の苦海に沈淪し続ける衆生の存在する限り、不可思議兆載永劫にわたって積植せらるべきものとして、法蔵の思惟と修行の永劫性・絶対性が説かれている。まことに如来においては、一如よりの来生は、一如への還帰を意味し、「如↓来する」ことが「如↑来する」ことの他ではない。『唯信鈔文意』において、「来迎」の「来」の意義を求めて、「きたる」と「かへる」の二つの意義を見出しているように、如来は「如↓来する」ことにおいて「如↑来」したまうのである。「いまだ仏になりたまはぬときの御な」、即ち因位としての南無阿弥陀仏とは、このような法蔵菩薩の名において語られる如来の願行、すなわち如来の「如↑来」性を意味するといえよう。

では、「仏になりたまふてのちの御な」、即ち果としての南無阿弥陀仏とは何か。それこそ本願成就の事実以外の何ものでもない。名は因位本願における名、すなわち「本願招喚の勅命」であり、号は果位としての行成就を意味し、本願が本願自身を成就している名を意味している。南無阿

弥陀仏の名号に因果を見出す理解は、単に南無阿弥陀仏の解釈ではなく、衆生救済の事実としてはたらき、その救済の事実を最も端的に語る南無阿弥陀仏を、その根源に立つて根源のはたらきを名号の因果において了解されたものである。

五

衆生の救済とその救済への根源的覚醒は、因果において一切衆生を自己となさんとする如来のはたらきによるのではない。一切衆生を自己となし、自己となった如来、すなわち一如より来生して法蔵菩薩となって如来の本願を感得した報身如来を、親鸞は、「尽十方無碍光如来」、あるいは「帰命尽十方無碍光如来」と了解した。しかるに帰命尽十方無碍光如来とは、世親の『浄土論』によれば、何よりも一心帰命の信心としての本願の信の表白である。帰命尽十方無碍光如来は、如来の名号を顕わすものであると共に、本願の信の表白でもある。如来の名号と衆生の信心とが同一の言葉をもって表わされているところに、深く注意すべきものがある。それは、本願の信は本願の名号を所依として、南無阿弥陀仏の名号を根本としてのみ成就することを現わし、従って親鸞は、この一点に立って、一心帰命の信

を行信として捉え、その本質を「選択本願の行信」として了解するのである。行信としての一心帰命の信こそ、如来の生きてはたらく現実態であり、名号は衆生の行信としてこそ、仏道の法としてのはたらくを現実を実現するのである。それ故に衆生の行信を離れて名号を語るならば、それは教理としての名号の解説であっても、わが身に生きてはたらく名号のいのちを明らかにするものとはならない。一心帰命の本願の行信において自覚的に自証された如来、それが尽十方無碍光如来であり、帰命尽十方無碍光如来である。

「無始より已来、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信樂なし、法爾として真実の信樂なし。」⁶⁾といわれる無明流転の衆生が、ひとたび一心帰命の本願の行信に目覚め立つとき、まさにその無明流転の闇を破り、衆苦輪の繫縛から真に自由ならしめる無碍光を、いまさらのように深々と自覚自証することとなる。煩惱成就の故に無明海に沈迷してきた衆生が、本願の行信において、それを破り転ずる無碍光に覚醒し、如来の真実功徳を自証するものと再生するのである。それ故に、帰命尽十方無碍光如来とは、一心帰命の本願の行信において、一切苦悩の群生海が、すでに如来の無碍光の中

に摂照され、撰取されてあるという、根本的覚醒を現わすものであるに違いない。親鸞は、『唯信鈔文意』に、「涅槃」を滅度・無為・安樂・常樂・実相・法身・法性・真如・一如・仏性・如来と転釈して、

この如来微塵世界にみち／＼たまへり、すなわち一切群生海の心なり、この心に誓願を信樂するがゆへに、この信心すなわち仏性なり、仏性すなわち法性なり、法性すなわち法身なり。(『定観全』三・一七一頁)

といわれたように、如来は、如来に覚醒し、如来を自覚的に自証した「一切群生海の心」を離れて別にあるものではない。信仰的自覚において現にはたらく如来、一心帰命の本願の行信において明々白々と自証される如来、それこそ帰命尽十方無碍光如来であり、「一切群生海の心なり」といわれる生ける如来である。帰命尽十方無碍光如来について、親鸞は『尊号真像銘文』に、

「帰命尽十方無碍光如来」とまふすは、帰命は南無なり、また帰命とまふすは如来の勅命にしたがふことなり、また帰命とまふすは如来の勅命にしたがふことなり、也、尽十方無碍光如来とまふすはすなわち阿弥陀如来なり、この如来は光明也。尽十方といふは、尽はつくすといふ、ことごとくといふ、十方世界をつくしてことごとくみちたまへるなり。無碍といふは、さわるこ

となしと也、さわることなしとまふすは衆生の煩惱悪業にさえられざる也。光如来とまふすは阿弥陀仏なり、この如来はすなわち不可思議光仏とまふす。この如来は智慧のかたちなり、十方微塵刹土にみちたまへるなりとするべしとなり。〔定親全〕三・八六―七頁)

といて、本願の行信に自証される如来を端的に「光如来」と捉えている。光は智慧のはたらきの象徴である。如来に帰命すという一心帰命の信心とは、虚妄分別の闇を破って法性真如の光の世界に喚び帰される覚醒に他ならない。

親鸞は『教行信証』『真仏土卷』の最初に、
 謹按ニ真仏土者、仏者則是不可思議光如来、土者亦是
 無量光明土也。然酬報大悲誓願ニ故曰ニ真報仏土。
 既而有願、即光明・壽命之願是也。〔定親全〕一・
 二二七頁)

といて、仏身のみならず仏土もまた「光明」をもって了解している。「不可思議光如来」「無量光明土」といて、仏身・仏土ともに光明をもって解されているのは、大悲撰化の具体的なたらぎを示さんがためであるまいか。もともと「撰法身の願」として如来自身の成就を願う第十二・光明無量の願と第十三・壽命無量の願を、同時にそれが真仏土・浄土の成就を誓う本願であると了解されていること

からすれば、親鸞においては、仏身と仏土、如来と浄土とは決して別の範疇ではなく、二にして一である。すなわち不可思議光如来に無量光明土という意味があり、如来に帰命する心は、そのまま無量光明の浄土を見出した心に他ならない。如来がその本願において、一切苦悩の衆生の根底にまで「如↓来」し、その撰取救済をもって、真に「如↑来」たらんとする大悲のはたらきであったように、浄土もまた、大悲撰化の本源として、衆生の一心帰命の信心の現在に開示され、「如↓来」する世界であるといえる。

浄土は如来の正覚の世界として無上涅槃界である。『唯信鈔文意』に、
 涅槃界といふは無明のまどひをひるがへして、無上涅槃のさとりをひらくなり。界はさかといふ、さとりをひらくさかいなり。〔定親全〕三・一七〇頁)

と言われるように、浄土は無為涅槃界であって、それ故にわれら衆生の「無明のまどひをひるがへして」「ひらくさかい」である。しかし、浄土は無為涅槃界であり、無上涅槃の功德のはたらきと世界であるが、真実功德を体とする如来自身のはたらきと決して別なる世界ではない。だから帰命尽十方無碍光如来なる本願の行信は、本願酬報の土である真実報土がわが身に開示された自覚であるといえよう。

尽十方無碍光如来に帰命した心は、「無明のまどひ」を「ひるがへし」、「いわば無明を摧破し転じた自覚であるが、それは同時に、無量光明土という限りない光の世界が開き示された自覚であるといえる。如来の自内証である無上涅槃界が、

爾者若行若信、無有^シ一事^ト、非^ニ阿弥陀如来清淨願心之所^ニ回向成就^一。非^下無^ニ因^一他^ニ因^上有^也、可^ニ知^一。〔教行信証〕信卷・『定親全』一・一一五頁)

と頷かれた「阿弥陀如来の清淨願心の回向成就」である本願の行信において、真如一実の功德としてわが身の上に生き生きとはたらき開き示されることを、親鸞は深い感動をもって語っている。

よく本願力を信樂する人は、すみやかにとく功德の大宝海を信ずる人のそのみに満足せしむる也。〔尊号真像銘文〕・『定親全』三・八九頁・傍点筆者)

安楽浄土の不可称・不可説・不可思議の徳を、もとめず、しらざるに信ずる人にえしむとしるべしとなり。

〔一念多念文意〕・『定親全』三・一三一頁・傍点筆者)

如来の本願を信じて一念するに、かならずもとめざるに、無上の功德をえしめ、しらざるに広大の利益をうるなり。(同・一三七頁・傍点筆者)

しかれば、金剛心のひとは、しらすもとめざるに、功德の大宝そのみにみちみつがゆへに、大宝海とたとえるなり。(同・一四八頁・傍点筆者)

本願の行信の表白である帰命尽十方無碍光如来、この行信が、行も信も「如来の清淨願心の回向成就」であるからこそ、名号は本願成就の尊号と仰がれるべきものであって、その尊号が、尊号のもつ真実功德を、行信に帰命した人の上に、「すみやかにとく」「しらすもとめざるに、功德の大宝」を、現前せしめ現成せしむることとなるのである。名号のもつこのような深甚の不可思議のはたらきを、親鸞は「名号不思議」という言葉で語ったに違いない。

この如来の尊号は、不可称・不可説・不可思議にましまして、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のちかひの御なり。

ひとすちに具縛の凡愚屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。〔唯信鈔文意〕・『定親全』三・一六八頁)

名号を「如来の尊号」と仰ぐことによって、親鸞は、念仏が往生浄土の行であるという浄土教の伝統的理解をさらに根源化して、名号をもって「浄土真実の行」と確認し、

衆生を大般涅槃道に立たしめる唯一の法であることを明らかにしたのである。

註

- ① この点については、すでに寺川俊昭著『歎異抄の思想的解明』一三頁以下に指摘し言及されている。
- ② 善導の『往生礼讃』に「余比日自見之聞、諸方道俗、解行不同、専雜有異。但使専一意作二者、十即十生。修雜不至心者、千中無一。」(『真聖全』一・六五二頁)とある。
- ③ 『教行信証』信卷・『定親全』一・一一五頁。
- ④ 『一念多念文意』・『定親全』三・一四五頁。
- ⑤ 『唯信鈔文意』に
- ⑥ 『教行信証』信卷・『定親全』一・一二〇頁。
(本学教授 真宗学)
- 「来迎といふは、来は浄土へきたらしむといふ、これすなわち若不生者のちかひをあらはず御のりなり。穢土をすて、眞実報土にきたらしむとなり、すなわち他力をあらはず御ことなり。また、来はかへるといふ、かへるといふは願海にいりぬるによりて、かならず大涅槃にいたるを法性のみやこへかへるとまふすなり、法性のみやこといふは法身とまふす如来のさとりを自然にひらくときを、みやこへかへるといふなり。」(『定親全』三・一五九一六〇頁・傍点筆者)と述べられてゐる。